

新宅 瞳仁 / SHINTAKU Tomoni

1982年 広島県生まれ
2005年 九州産業大学芸術学部美術学科卒業
2013年 新宿調理師専門学校調理師本科卒業
現在 シンガポール在住

個展

2016年 「コンビニ弁当の山-Time is money.」 トキヨーワンダーサイト渋谷、東京
2016年 「BENTO」ザ・パレスサイドホテル、京都
2016年 「コンビニ弁当の山」静岡市クリエーター支援センター（CCC）、静岡
2015年 「カップヌードルの滝」HAGISO、東京
2014年 「牛丼の滝」沢田マンションギャラリー room38、高知

グループ展

2017年 「UMU-Q - 九州産業大学芸術学部優秀作品展」上野の森美術館、東京
2017年 「ミニ UMU-Q」ターナーギャラリー、東京
2017年 「UMU-Q - 九州産業大学芸術学部優秀作品展」九州産業大学芸術学部アートギャラリー、福岡
2016年 「Independent TAGBOAT ART FES」ヒューリックホール、東京
2016年 「a3 project / season 2016」 MATSUO MEGUMI + VOICE GALLERY pfs/w、京都
2015年 「退廃藝術展 2015」DESK/okumura、東京
2015年 「美術食堂」ART SPACE ZERO-ONE、大阪
2013年 「POSSIBLY TALENTED Vol.3」THE blank GALLERY、東京
2013年 「第6回 ガキグラ展」ギャラリーおいし、福岡
2012年 「YOUNG ARTISTS JAPAN Vol.5」東京デザイナーズウイーク（TDW）内、東京
2004年 「師寿瞳仁展」LAPIN ET HALOT、東京
2000年 「大覚展」NHK ギャラリー、福岡

受賞・入選

2015年 TWS-Emerging 2016 入選
2015年 CCC 展覧会企画公募 New Creators Competition 2016 入選
2015年 トキヨーワンダーウォール公募 2015 入選
2015年 ワンダーシード 2015 入選
2013年 第2回 宮本三郎記念デッサン大賞展 入選
2005年 別府アジアビエンナーレ 2005 入選

その他の活動

2007年 横口師寿（馬画鹿家名義でも活動中）とアートユニット「ART DIS FOR」結成
ART DIS FORでの個展

2008年 「Shopping」ART・IN・GALLERY、東京
「くたばれ東京藝大展」ART・IN・GALLERY、東京

ART DIS FORでのグループ展

2011年 「"petit"GEISAI #15」 東京都立産業貿易センターホール、東京
2010年 「千代田芸術祭 3331 アンデパンダン」アーツ千代田 3331、東京
「Unknown possibility 03」新宿眼科画廊、東京
「GEISAI #14」東京ビックサイト、東京
2009年 「Unexpected」新宿眼科画廊、東京
「ART & PHOTOBOOK EXHIBITION」新宿眼科画廊、東京
「東京アンデパンダン展」COEXIST、東京
「The Artcompe X」The Artcomplex Center of Tokyo、東京

ART DIS FORでの受賞・入選展

2009年 第13回新生展 入選
2009年 第45回神奈川県美術展 入選

Statement

食物をモチーフに作品を制作している。特にファーストフードやジャンクフードの類、たとえば牛丼やカップヌードル、コンビニ弁当等の卑近な食べ物を用いて、現代の状況をクリティカルに、単純明快かつシニカルに表現することを試みている。

主な作品に、牛丼やカップヌードルを落下させ、自然界の滝のようにして描くことで、味わうことなく猛然と胃袋に流し込まれる現代人の食の実態を具現化した「牛丼の滝 / カップヌードルの滝」シリーズ。日々大量に廃棄されるコンビニ弁当を山のように積み上げ、そこに日本的な心性である米一粒にも神を見出すアニミズムをからめて表現した「コンビニ弁当の山」シリーズ。

日本人の持つ偏狭な対外的視線を、世界各国のさまざまな食品・料理を円形に型どり、日本の国旗の比率の支持体に日の丸に見立てて配置する Japanize(日本化) シリーズ。世界中で加速する富裕層への富の集中、それによって求められる富の再分配を、ケーキを切り分けるという行為に象徴させて表現した「みんなで食べよう」シリーズがある。(2015.5.7)



Hidden Flag-Jan 04,2017 at Smith St
2017年 パネルにキャンバス、アクリル

Hidden Flagシリーズのコンセプト

日本は1942-1945年までシンガポールを占領し、昭和の時代に得た南の島ということから「昭南島（しょうなんとう）」と名づけた。それから70年あまり、現在シンガポールはアジアを牽引するほどの繁栄を誇り、その痕跡など何も残していないかのように見える。一方、その時代を生きた老人の口からは容易に「SYONAN」という言葉を引き出すことができるし、シンガポール国内に慰靈碑や資料館の類は少なくない。

確かに戦争は終わり、占領もまたはるか昔に終わっている。だが、日本が侵略したという歴史的事実は、いくら表面的には拭い去られても、永久に消えることなく底流に存在し続けるだろう。

本シリーズは、日本とシンガポールの過去～現在に至る歴史とその関係性を捉え直す試みである。シンガポールの日常のありふれた食事風景に、日本のお子様ランチによく見られる日の丸の爪楊枝を忍ばせる。それは他愛ない飾りだと言えばそれまでだが、しかし両国の歴史を鑑みれば公然たる侮辱とも取れるだろう。国旗を突き立てるということは、しばしば征服の意味を持つからである。

あるひとつの行為が両極の意味を持って存在するとき、我々はどのように受け取ればよいのだろうか。

新宅睦仁 -Painting-



Hidden Flag-Dec 29,2016 at Changi Rd
2017年パネルにキャンバス、アクリル

Hidden Flagのための写真素材撮影風景





コンビニ弁当の山 #41-01
2015/33x53cm/パネルにモンバル紙、水彩

コンビニ弁当の山シリーズのコンセプト

コンビニから出る一日の廃棄量は、弁当に換算して平均30個といわれる。例えばセブン-イレブン1万7000店舗で考えれば51万食分、金額にして2億5500万円分となる。これが365日、コンビニ各社の各店舗から出ているのである。

そこで単純な発想だが、この廃棄されるコンビニ弁当を集めて積み上げれば山になる。むろん、実際にそんな山を目にする事はないのだが、日本中に確かに存在するコンビニ弁当の山を具現化した作品が本シリーズである。私は、このコンビニ弁当の山は、日本における靈山にあたるのではないかと思っている。なぜなら、米一粒にも神を見出す日本人の宗教観を踏まえれば、当然そこには神が住まうからだ。白米をはじめ、唐揚げ、卵焼き、スペゲッティ、漬け物など、そのひとつひとつに神がいる。つまり八百万の神がいる山となれば、それこそ靈山と呼べるのではないだろうか。

ただし、それは廃棄される神でもあるわけで、時に神は、賞味期限切れと同時に死んでしまっているのだろうか。または、輪廻転生してどこかに生まれ変わるのである。あるいは、神は無力で、なされるがままに捨てられ、殺されるだけなのかな。それ以前の問題で、そもそも神などいないのかもしれない。

現代の宗教画ともなりえるコンビニ弁当の山の前で、自分を含めたすべての人間に問いたいと思う。



コンビニ弁当の山 #41-02
2015/45x38cm/パネルにモンパル紙、水彩



コンビニ弁当の山 #41-03
2015/130x162cm/パネルにモンバル紙、水彩

「コンビニ弁当の山」シリーズの写真素材撮影風景

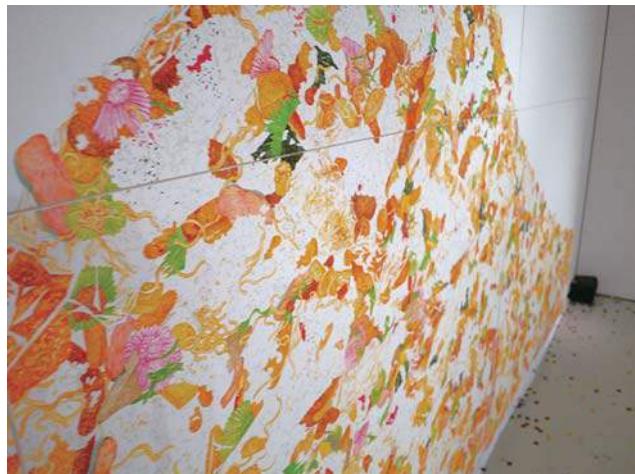


個展「コンビニ弁当の山」展示風景

約5m×3mの「コンビニ弁当の山」の絵画を中心に、
「鏡」、「酒」、「音楽」を組み合わせ、宗教的儀式として構成したインスタレーション。

《コンビニ弁当の山@CCC》 2016年

絵画部分：パネルにモンバル紙、水彩、260×486 (cm)
アルミカップ部分：底面にミラーシートを貼付したアルミカップ・
中敷き用の透明プラカップ各約 2000 個、日本酒、食品添加物流
動パラフィン、防腐剤、サイズ可変
賽銭部分：1 円硬貨、5 円硬貨、10 円硬貨、50 円硬貨、100 円硬貨、
500 円硬貨、合計約 2000 枚、サイズ可変
音声部分：パワーアンプ、ラウドスピーカー 4 台、MP3 プレーヤー





BENTO-January 19, 2016
2016/33×45cm/パネルにキャンバス、アクリル

BENTOシリーズのコンセプト

日本の伝統的なBENTO（弁当）は、完成された食形態のひとつであり、近年、世界的な流行をみている。その理由はビジュアルや様式美ばかりではない。小さな箱の中に、必要十分な食物が工夫をこらして無駄なく収められている弁当には、『持たない暮らし（ミニマリスト）』のような現代思想との高い親和性が見い出せるのである。本シリーズは、弁当にあるミニマリズムを突き詰めて実践しようとする試みである。作家自らが料理し、弁当をあって食べる。その一連の流れのトレース及び圧縮として、絵画作品を描き起こす。そうすることにより、単なる弁当の概念を超えて、ひとつの”ミニマルな生き方”をも提示できる可能性を持たせられるのではないだろうか。



BENTO-March 6, 2016
2016/33×45cm/パネルにキャンバス、アクリル



BENTO-May 1, 2016
2016/33×45cm/パネルにキャンバス、アクリル

「BENTO」シリーズの写真素材撮影風景





Paste Abstraction#01
2015/38x45cm/パネルにモンバル紙、水彩

Paste Abstractionシリーズのコンセプト

人間が生まれて初めて口にする自然物は、流動食（離乳食）である。それは、人間が地球の生態系の中の一分子として歩み始めたことを証する食物でもある。一方、病や老いといった死が近いところで口にするのもまた同じように流動食である。

そのように考えると、流動食とは、この世界への参加と離脱、つまり生と死という、相反する性質を持つアンビバレンントな食物だといえるのではないだろうか。本シリーズは、流動食に内包されている両義性をあぶり出そうとする試みである。

流動食を、打ち水のようにぶちまけたり、ストライプやドットといった規則的なパターンとして配置したりする。それは、何かを調べる際の基本である、切る・碎くといった分析解剖の態度である。そこには自ずと、生と死とが交互に、あるいは混交して、消えつ浮かびつするのである。

ex. 離乳食は乳児用の名称であり、流動食という食事形態に、離乳食は含まれる。



Paste Abstraction#02
2015/33x45cm/パネルにモンバル紙、水彩

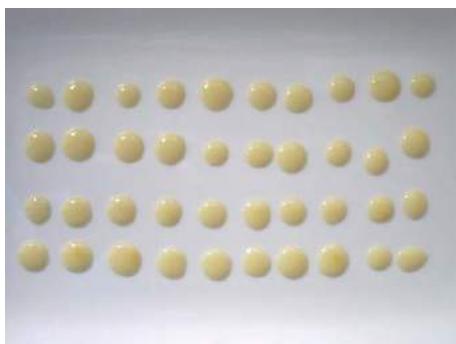


Paste Abstraction#03
2016/72×91cm/パネルにモンバル紙、水彩



Paste Abstraction#04
2016年 パネルにキャンバス、アクリル 45×45cm

「Paste Abstraction」シリーズの写真素材撮影風景





Japanize! (キムチ/韓国)
2015/26x39cm/パネルにモンバル紙、水彩

Japanize!シリーズのコンセプト

四方を海に囲まれている日本は、長い鎖国もあり、現代でもなお島国根性が根強い。その例証のひとつとして、2015年初頭のイスラム国日本人拘束事件における「ISISクソコラ画像グランプリ」を挙げたい。緊迫した状況の中、テロリストや人質をおもしろおかしくコラージュした画像がインターネット上に氾濫したのである。あくまでも一部の日本人の行為とはいえ、それを許容してしまう雰囲気があることもまた事実ではないだろうか。対岸の火事のように危機感も現実感もなく、日本の平和ボケした価値観で世界と対峙していることが見て取れるのである。

本シリーズは、そのような日本人の島国根性的なまなざしを、あらゆる国や民族において思想文化の根幹をなす食をモチーフとして具現化させようとする試みである。世界各国のさまざまな食品・料理を円形の型枠にぎゅうぎゅうに押し込みて型どる。それを、日本の国旗の比率の支持体に、日の丸に見立てて配置する。即ちJapanize(日本化)である。

ex. イスラム国日本人拘束事件の映像を、切り貼りして面白おかしく加工した画像がネット上に大量に流された。イスラム国の男が逆に捕らわれているように人物を入れ替えた画像や、かざしているナイフをビールに持ち替えさせて乾杯しているかのようにした画像、日本人2人の顔がアニメのキャラクターに置き換えられている画像等、無数のコラ画像が「ISISクソコラ画像グランプリ」としてTwitter上で拡散した。また、これら一連の画像に反応したテロリストから、「日本人へ おまえたちは楽観的だな。5800kmも離れてるから安全だと思っているのか? 我々の武力はどんなに遠くても届くぞ」と警告が発せられた。



Japanize!(ソーセージ/ドイツ)
2015/26x39cm/パネルにモンバル紙、水彩



Japanize!(ケバブ/トルコ)
2015/26x39cm/パネルにモンバル紙、水彩

「Japanize!」シリーズの写真素材撮影風景





みんなで食べよう (24人で)
2015/41x27cm/パネルにモンバル紙、水彩

みんなで食べようシリーズのコンセプト

2011年、アメリカのニューヨークで”We are the 99%”をスローガンに、「ウォール街を占拠せよ」という抗議運動が発生した。これは、上位1%のスーパーリッチと呼ばれる富裕層が所有する資産が増加し続けている反面、残りの99%が取り残されていることに端を発している。2007年のデータでは、スーパーリッチがアメリカの全ての資産の34.6パーセントを握っているという。また、このような富の異常な偏在は世界中で加速しており、2016年にはスーパーリッチの1%だけで世界の富の半分以上を手にすることになるとも言われている。

そのような状況において、政治経済に貧富の差を緩和するための富の再分配機能の強化が求められるのは当然の流れではある。現在の世界は、あまりにも不公平で不完全なのかもしれない。しかし、そもそも”完全に平等な完璧な世界”などありえるのだろうか。

本シリーズは、現代社会における富の再分配の可能性を、ケーキを切り分けるという行為に象徴させて問う試みである。みんなでケーキを分け合って食べよう。2人で、4人で、あるいは100人、1,000人で。富は、どこまで平等に分け合うことができるのだろうか。



みんなで食べよう（54人で）
2015/33x53cm/パネルにモンバル紙、水彩



みんなで食べよう（16人で）
2016/30×30cm/パネルにモンバル紙、水彩



みんなで食べよう (62人で)
2016年 パネルにキャンバス、アクリル 45×45cm

「みんなで食べよう」シリーズの写真素材撮影風景





カップヌードルの滝 #44-02
2015/41x24cm/パネルにモンバル紙、水彩

カップヌードルの滝シリーズのコンセプト

日本を代表する食の発明品カップヌードルは、究極の合理的な食事である。

容器と食物の一体化。お湯を注いでたった3分。誰が作っても同じ味。食べ終わればごみ箱へ。その簡便さとスピード感は、日本人の生活そのものを変えたと言っても過言ではない。たとえば、ひとりでの食事、いわゆる孤食の増加に一役買った。食べるという行為自体を単調で作業的なものにした。あるいは、食物とは何かという概念を拡張・変容させたとさえ言えるのではないだろうか。

なにはともあれ、良くも悪くもカップヌードルは消費され続けている。それは、豊かさと貧しさのどちらを象徴するのだろうか。あらゆる場面、あらゆる場所で、ずるずるずると、”合理的かつスピーディに”、延々と胃袋へと落ちてゆく。そのようなイメージを、カップヌードルを落下させ”カップヌードルの滝”のような構成にすることで表現している。



部分拡大

カップヌードルの滝 #69-11
2015/123x24cm/パネルにモンバル紙、水彩

「牛丼の滝/カップヌードルの滝」の写真素材撮影風景

実際に牛丼やカップヌードルを落下させ、それをプロカメラマンによって撮影。その写真素材をもとに、PCで加工、組み合わせて構図を検討し、絵画作品の下絵を練る。その後、プロジェクターを使用して、パネル/キャンバスに投影して制作している。



個展「カップヌードルの滝」展示風景

5m超の巻物状のカップヌードルの滝の絵を吊るし、床面には割り箸5万膳を敷き詰めたインスタレーション。

《カップヌードルの滝@HAGISO》 2015年

各絵画部分：和紙（白峰）、水彩、カップヌードルのバーコードを印刷した透明テープ、掛け軸用八双・軸棒、30×550（cm）、70×550（cm）、100×550（cm）

割り箸部分：約5万膳、アクリル、木工用ニス、マグネットシート、スチールシート、カップヌードルの空殻、サイズ可変

音声部分：MP3プレーヤー、ヘッドホン





牛丼の滝 #116-02
2015/41×24cm/木製パネルにモンバル紙、水彩

牛丼の滝シリーズのコンセプト

早くて安くて旨いというコンセプトで、サッと出てきて、チャチャッと食べる。惰性的に、作業的に、あるいは単なる熱量、カロリーとして食べる。

それは、味わうものではなく流し込まれると言ってもいいような食文化であり、そこには本来の「食べること＝生きること」というような生命観、あるいは倫理観は微塵もない。

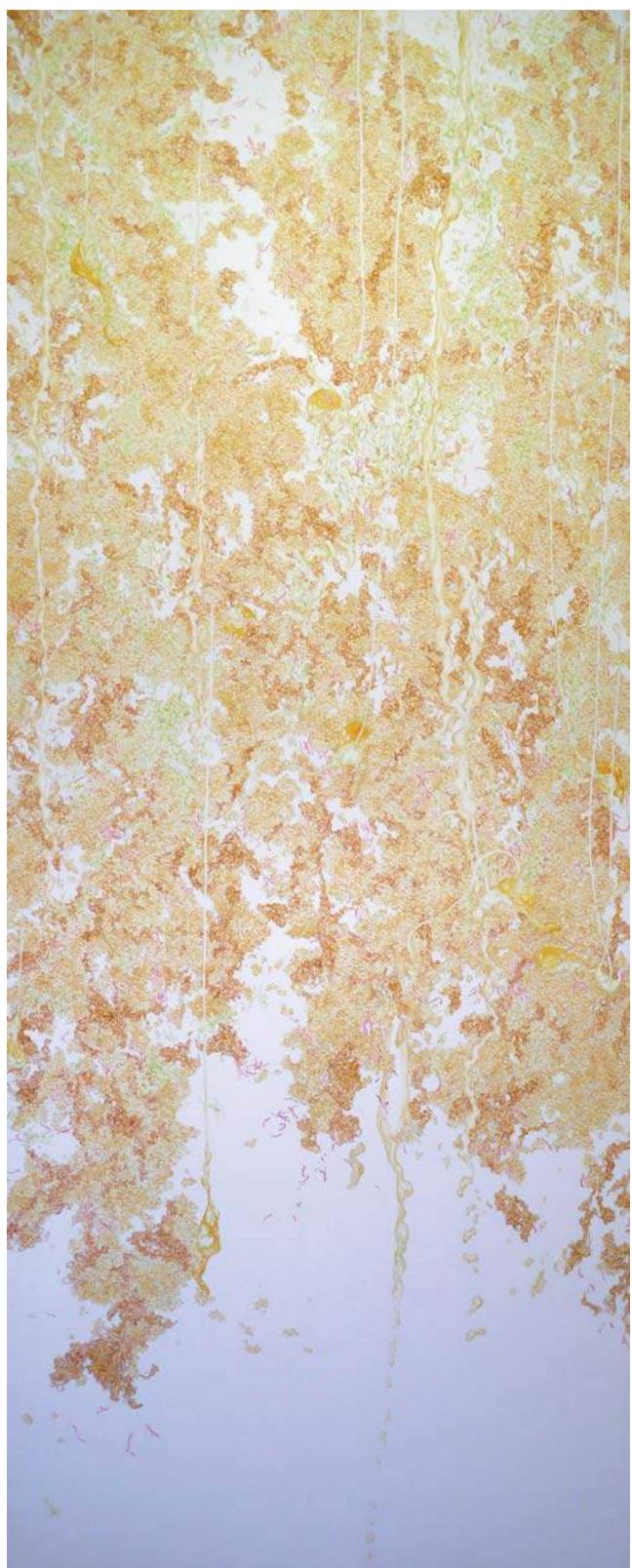
現代日本をはじめ、飽食の先進国においては至極普通のことであるが、立ち止まってよくよく考えてみると、どこかそら恐ろしい感じがしやしないだろうか。

そのような危惧と問題提起を、日本の代表的なファーストフードである牛丼に象徴させて、大衆の胃袋に無秩序に際限なく落ちていくイメージを、牛丼を落下させ“牛丼の滝”のような構成にすることで表現している。

なお、カップヌードルについても、牛丼同様の扱われ方をしているファーストフードのひとつであり、“カップヌードルの滝”として構成している。



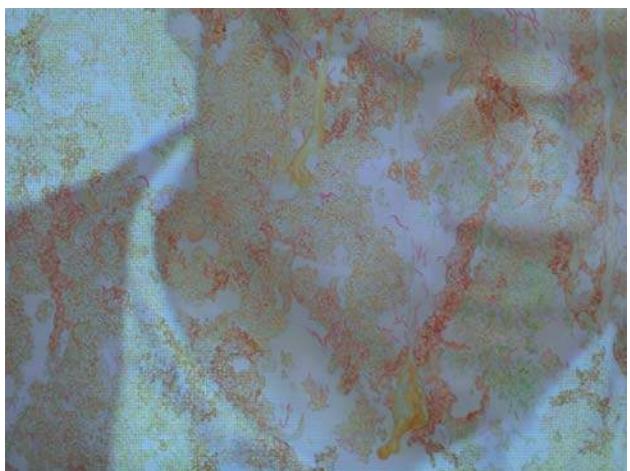
牛井の滝 #116-01
2015/123×24cm/木製パネルにモンバル紙、水彩



牛井の滝 #69-04
2014/233.4×91.0cm/木製パネルにモンバル紙、水彩

個展「牛丼の滝」展示風景

主要作品:《牛丼の滝#115-05 installation ver1.0》2014年パネルにモンパリ紙、水彩
プロジェクトター、DVD プレーヤー、アンプ、スピーカー 2台 162×336cm

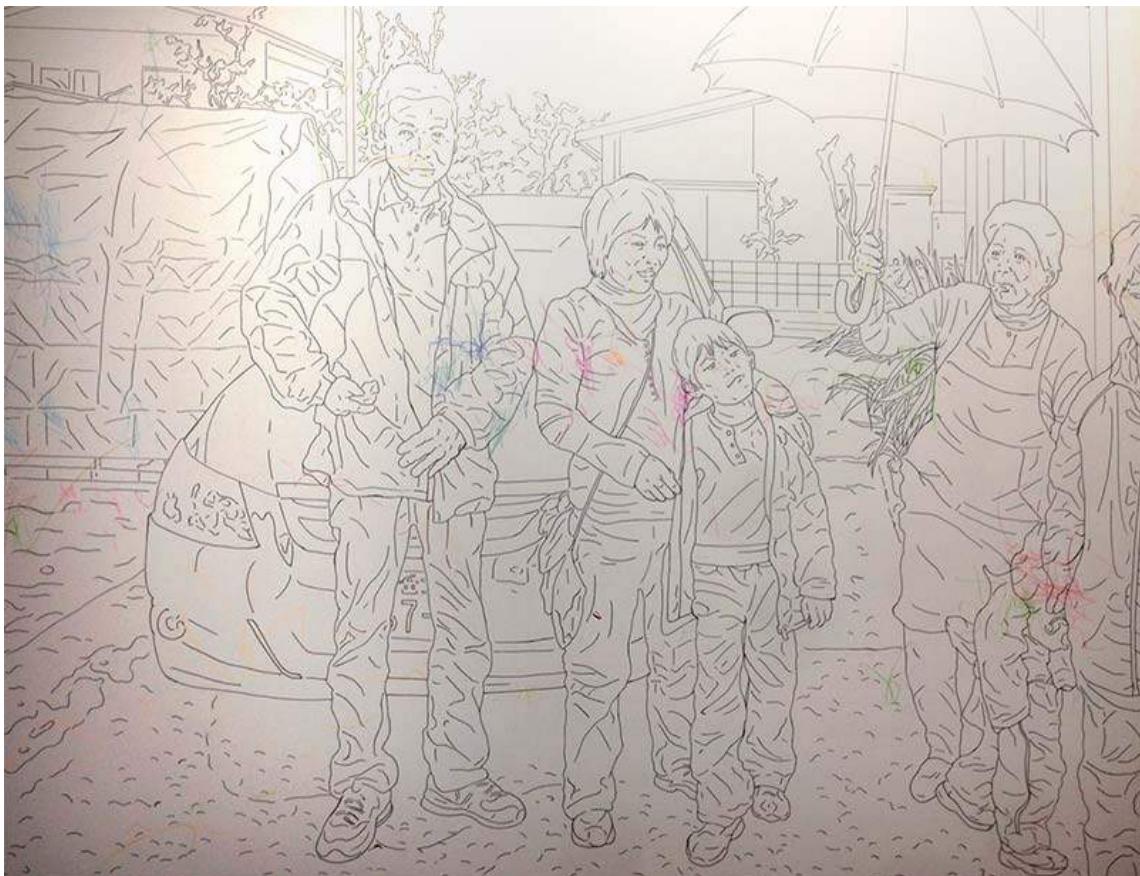


「牛丼の滝」インスタレーション用映像制作協力者撮影風景



「牛丼の滝」インスタレーション用映像のための吉野家の撮影素材





不自然のドローイング#02 /2013/116.7x90.9cm / 木製パネルにケント紙、ペン、色鉛筆
第2回宮本三郎記念デッサン大賞展入選

不自然のドローイングシリーズのコンセプト

正直な話、子供の塗り絵からの発想である。どこにでもある、アニメのキャラクターなどの塗り絵。それに子供は、ほとんど白紙と同様に描写する。正確な黒い輪郭線に対して、はみ出すもなにもなく、自由奔放、勝手気ままに描き廻る。今まで何度も見たく見たことがあり、また見流してもきたそのビジョンの新しさに、ぼくはあるとき啓示を受けるように気がついた。それは新しい抽象絵画だと思われた。しかし厳然たる正確な輪郭線が、具象へも押し戻そうとしていて、判然としない。具象と抽象。それは古くて新しい問題である。半具象だと半抽象だとかいう言語表現にもある通り、それはいまだにせめぎあっている。それはともかく、まったく、ぼくがやろうとしていることは子供の塗り絵そのものなのである。しかしこのばかばかしいほどの単純な手法は、現代における具象絵画、抽象絵画のあり方に対するひとつの答えになり得るものだと確信している。

不自然のドローイングシリーズについて

現代のデッサンの可能性は、不自然な行為の中にしか存在しないのではないか？印刷物、テレビ、ウェブをさまよう無限の画像や映像。それらを空気のように吸う現代人にとっての現実は、何らかの媒体にコピーされた虚構の世界へと大きくシフトしている。本来デッサンは、目の前の「現実（立体）」をいかにそれらしく「虚構（平面）」に置き換えるかという行為であった。しかし今では虚構から虚構にそのままスライドさせるだけである。眼は機械的なカメラとなり、三次元を二次元に置換する不可能との格闘の中で生じる人間性は失われた。それはひとつの行き詰まりで、打破しなければならない。だから、いかにも人間らしい——しかし往々にして不自然な——汚れやしみ、かすれ、思わせぶりな筆致、奔放な線描で人間性の回復を図る、いや、そのように”見せかける”のである。

（第2回宮本三郎記念デッサン大賞展 提出課題より）



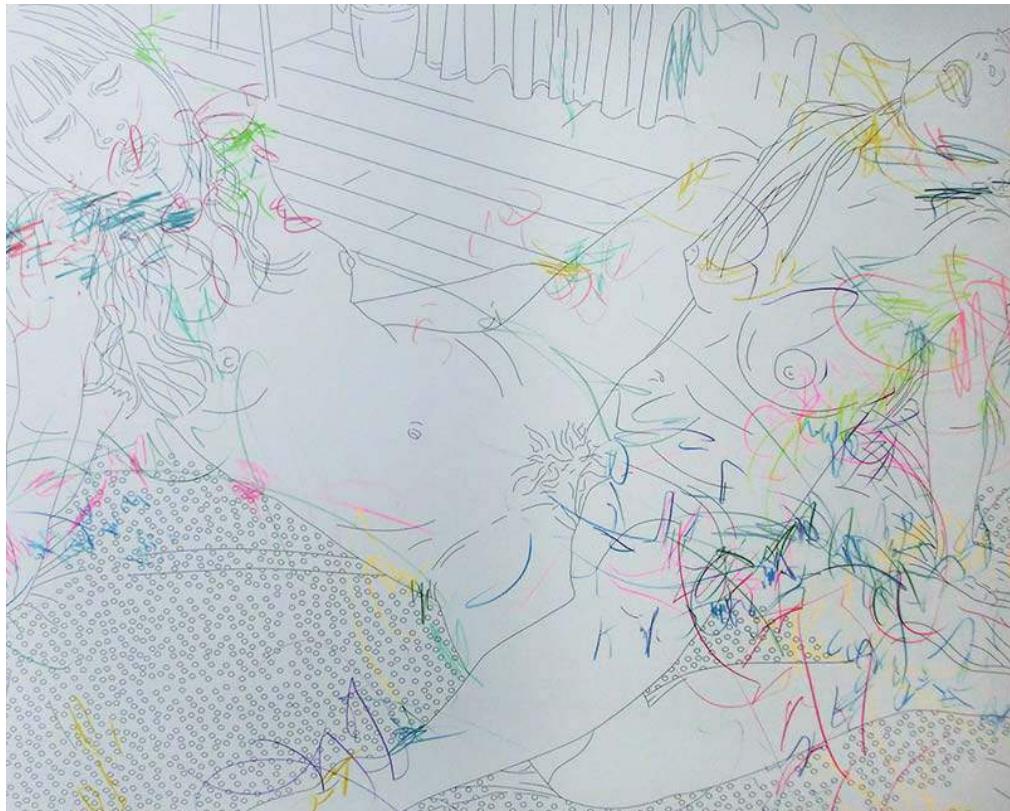
不自然のドローイング#11
2013/30x30cm/パネルにケント紙、インクジェットプリント、オイルパステル



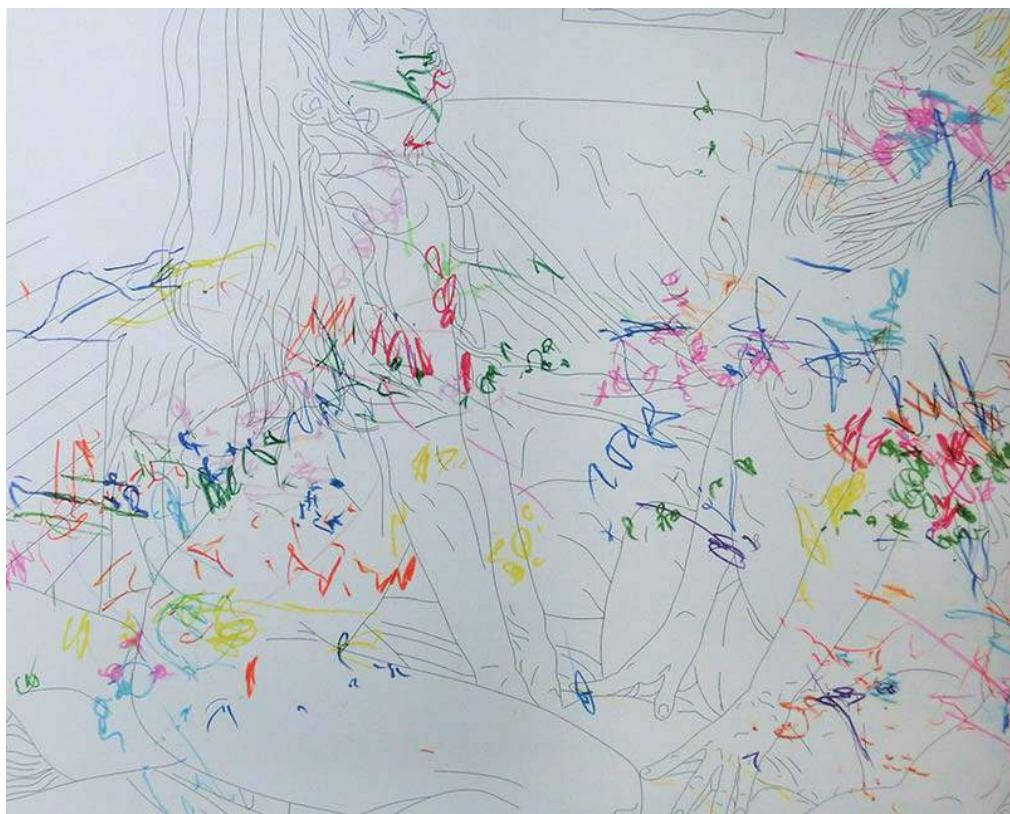
不自然のドローイング#10
2013/30x30cm/パネルにケント紙、インクジェットプリント、色鉛筆



不自然のドローイング#15
2014/53x53cm/パネルにケント紙、インクジェットプリント、色鉛筆



不自然のドローイング#12
2013/80.3x65.2cm/パネルにケント紙、インクジェットプリント、色鉛筆



不自然のドローイング#13
2013/80.3x65.2cm/パネルにケント紙、インクジェットプリント、オイルパステル



「フラッシュによる排除 No. 01」 / 2007 / 65.2×53.0cm / キャンバスにアクリル



「フラッシュによる排除 No. 06」 / 2007 / 65.2×53.0cm / キャンバスにアクリル



ZABATT No. 14 / 2008 / 90.9×60.6cm / キャンバスにアクリル



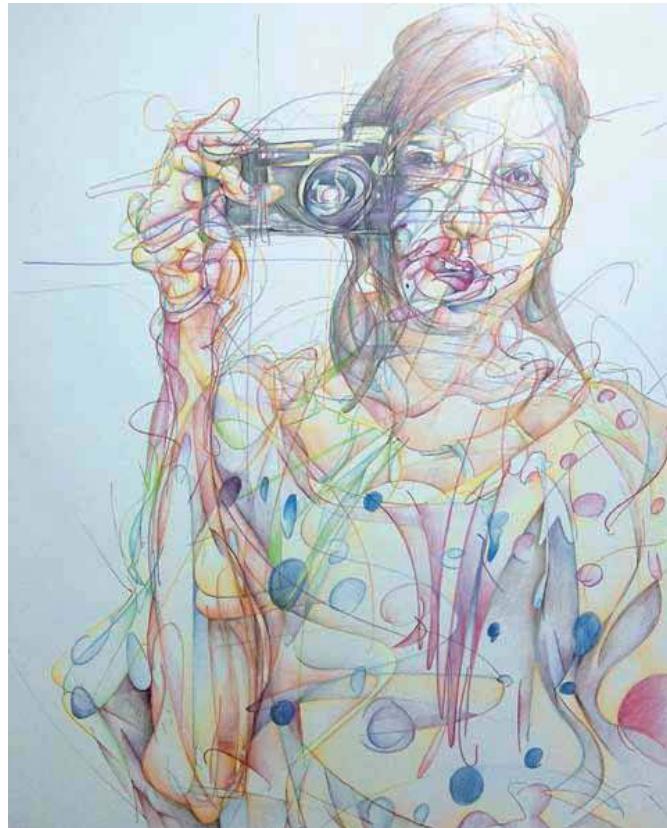
ZABATT No. 13 / 2008 / 116.7×90.9cm / キャンバスにアクリル



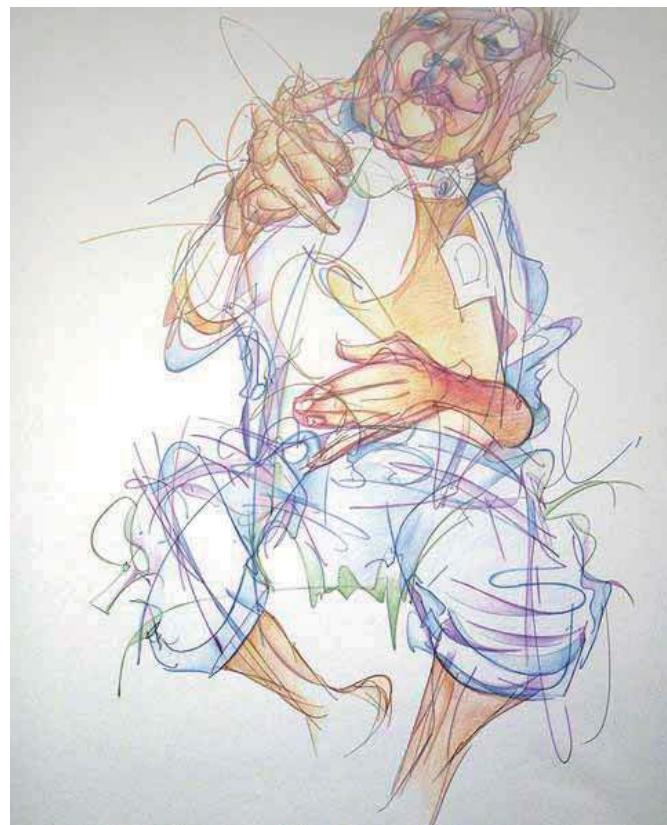
artificial_01 / 2009 / 145.5×112.1 cm / キャンバスにアクリル



artificial_02 / 2009 / 53×45 cm / キャンバスにアクリル



ワールド・トリレンマ #04
2010 / 90.9×72.7 cm / パネルにケント紙、ボールペン、色鉛筆



ワールド・トリレンマ #02
2010 / 90.9×72.7 cm / パネルにケント紙、ボールペン、色鉛筆